半島地域づくりフォーラムｉｎ宇土天草　概要

国土交通省都市・地域整備局半島振興室

○　２月２３日（土）のプログラム

事前に申し込みがあった全国の半島地域からの約80人（地域づくり団体、行政関係者等）が参加した。

《フィールドワーク》

参加者が４地区に分かれ、フィールドワークを実施した。

①　松島サイト
　自然体験学習のスタッフの育成方策と体験学習に必要とされる安全対策等について学んだ。

②　御領サイト
　歴史的な町並み歩きを通じた都市との交流活動、ボランティアガイドの育成方法等について学んだ。

③　龍ヶ岳サイト
　漂着流木と山林に繁茂する竹を使った竹炭づくりを通じ、身近な環境問題を考えた。

④　御所浦サイト
　農林漁家民泊に必要なノウハウと体験メニューづくりについて学んだ。

《宇土天草の食談義》

天草市御所浦島を舞台に、半島地域の海と山の食材を活用した郷土料理を味わいながら、参加者同士の交流を含めた。安田天草市長ほかが出席。

宿泊は、１３軒の漁家民宿に分泊した。

○　２月２４日（日）のプログラム

２日目は、上天草市松島総合センターを舞台に、公開フォーラムが行われた。山本国土交通大臣政務官及び潮谷熊本県知事より御挨拶をいただいた。出席者約３００人。

《半島地域からの事例報告》

①　廃校を利用した都市・農村交流の取組（苓北町）

②　青年農業者による電照菊のネット販売と小学校での食育の取組（上天草市）

③　地域の子供達を対象とした自然体験活動の取組（宇土市）

④　人口24人の高齢化集落での高齢者によるハーブ栽培と商品化の取組（幡多地域）

《平野啓子氏による民話「からいもと盗人」の朗読》

薩摩国の商人と天草の商人の友情が天草にからいも（サツマイモ）をもたらし、天草を飢餓から救ったという天草の民話の朗読を通じて、他地域との交流が地域を変えるきっかけになるというメッセージを伝えた。朗読は語り部の平野啓子氏、挿絵は天草民話の会の会員で天草市本渡歴史民俗資料館長の万五郎さん。

《パネルディスカッション》

テーマ：半島はつながる　－ローカル to ローカルが生み出す可能性－

コーディネーター：渋澤寿一氏（NPO 法人樹木・環境ネットワーク理事長）
パ　ネ　リ　ス　ト：平野啓子氏（語り部）
養父信夫氏（「九州のムラへ行こう」編集長）
若林伸一氏（NPO 法人自然体験学校理事長）

（渋澤）江戸時代、紀伊半島の吉野杉から作られた樽は伏見の酒樽となって江戸に送られ、練馬大根の漬け物樽や野田の醤油樽に活用されていた。半島の技術を都市に伝える販路があったということ。この歴史は、半島の可能性を考える上のヒントとなる。

（養父）マチとムラをつなぐ仕事をしてきた。今日のパネルディスカッションでは、半島同士がつながり、次に半島とマチがどうつながるかがテーマになるのではないかと思う。半島は島に比べると中途半端な立地であり、地域づくりのエネルギーを集約できなかったことに課題があった。しかし、時代は変わり、マチと中途半端につながっていることに半島の可能性が出てきたように思う。例えば、今注目されている二地域居住も、半島ならばできること。

（若林）半島地域は遅れてきたが故に魅力が残されている。例えば、繁茂して困りものになっている竹を素材として、いろいろな体験ができる。室津大島地域に行ったときも、たこつぼや無人島など体験観光のメニューになる素材がたくさんあった。旅行会社にそのときのことを話したら、ぜひ旅行商品化してほしいと言われた。

（渋澤）体験観光は、地域を巻き込んだ活動であり、旅行社も注目している。

（平野）語り部の仕事をしている。古代から語り部というのは、大事なことを語り伝えることが仕事だった。地方に行ってタクシーの運転手さんに名産は何かと聞くと、何もないという言葉が返ってくることがある。言葉というのは、恐ろしい。そう言われただけで、その土地が魅力ない場所に思えてしまう。昨夜の食談義では、魅力的な食べ物がたくさん出た。そのような魅力を発信していくことが大切。

（渋澤）体験観光を進めていく上での問題点は何か？

（若林）旅行は団体型から個人型に移行し、最後の団体旅行と言われている修学旅行も選択型、体験型に移行しており、体験観光の可能性は大きいが、安全対策などの整備がおろそかになっているのではないか。

（渋澤）九州の体験観光の現状はどうか。

（養父）大分県の安心院では、一軒の農家で囲い込むのではなく、風呂や体験は別のところでといった感じで、地域の６次産業化を図る取組が行われている。地域の６次産業

化の中で一番力を出せる分野が食。

（渋澤）農・林・水それぞれがばらばらではなく、地域経営として一体的に取り組んでいくことが必要。

（若林）「何もない」と言う地域に限って、鮭のつかみ取りの技術があったりと体験観光のメニューになる素材が眠っている。それを指摘すると、「そんなのでいいのか」と驚かれる。行政は情報発信が不得手。市町村ごとでなく、広域的な地域で体験観光のメニューを組み立てていく必要がある。また、ボランティアではなく、ビジネスとして体験観光に取り組む必要がある。

（渋澤）「外から来たお客様をもてなす」という関係でいてはダメ。

（平野）昨夜は民泊のホストご夫妻と２時まで語り合ったが、天草では死んだ魚を食べさせないということを知ったし、甘夏の皮を使ったゼリーも絶品だった。これらは観光パンフレットには書いていないが、限定品に弱い東京人は飛びつくのではないか。

（養父）一回目にどれだけおいしいものを出せるか、プレゼンテーションできるかどうかがリピーターになるかどうかの鍵。

（渋澤）半島には、驚きや知恵がいろいろある。

（若林）体験観光の特徴は、「新たな投資がいらない」、「副収入になる」、「交流人口の増加につながる」、「雇用が生まれ、地域全体が儲かる」、「地域の嫁対策になる」ということ。体験観光は、データベースの作り方、人材の育て方といった基本の形は同じ。活動団体をネットワーク化し、情報の共有化を行えば、無駄が少なく、より魅力的な、安全性の高いプログラムができるのではないか。そういったネットワークを半島で作る、例えば半島地域の体験観光の推進協議会のようなものができないか。

（養父）長崎の島どうしの連携を図るため、各島からの船が集まる佐世保に「島自慢食堂」というショップを提案している。半島自慢談義、半島の駅、半島のムラ歩きというのをやってもいい。また、半島同士でネットワークを組む際には、団塊の世代とか修学旅行とか、ターゲットを絞っていくことも必要だ。

（渋澤）半島ネットワークを作っていくため、情報の受発信を行う具体的な受け皿組織が必要な段階に来ている。昔はこれらの仕事は役場がやってくれたが、今では役場の企画課の仕事はＮＰＯが担っていく時代となっている。地域経営をどうするかという視点から検討が必要だろう。

《宇土天草－半島うまかもん昼市》

宇土天草地域の女性グループによる地域食材を活用した「島弁」をはじめとする地元産品や、他の半島地域の地域づくりグループが持ち寄った産品を販売する会を同時開催した。